

博士論文審査及び最終試験の結果

審査委員（主査） 村尾誠一 印

学位申請者 高 好真

論 文 名 三島由紀夫における「日本回帰」：「日本」と「天皇」に着目して

○結論及び審査の経過

高好真氏より提出された博士学位請求論文「三島由紀夫における「日本回帰」：「日本」と「天皇」に着目して」について、論文審査と最終口述試験の結果、審査委員会は一致して博士（学術）の学位を授与するにふさわしい研究論文であるとの結論に達した。

同論文に対しては、陳氏が博士後期課程在学中に指導委員会を構成していた柴田勝二（主任指導）、村尾誠一、加藤雄二の3名が事前審査を行い、多少の修正を施した後に学位請求論文を提出し、審査へ進むことが妥当であるとの結論を得た。論文提出後、学内から論文内容と重なる日本思想史の研究者である友常勉、学外から三島由紀夫文学の専門家である広島大学の有元伸子教授を加え、村尾誠一を主査として5名により審査委員会が構成され、2021年2月23日にZoomを用いたオンライン形式での公開審査が行われた。

○論文の概要

本論文は「日本回帰」を焦点として三島由紀夫の文学世界と作家自身の歩みを重ね合わせつつ、そこに浮かび上がってくる天皇の表象の問題を軸として論じたものである。構成としては第1部「「日本」への意識と同時代「日本」の表象」と第2部「「天皇」への接近と「日本回帰」」、及び第3部「「天皇」の在り方——〈相対主義〉と〈絶対的・超越的なもの〉への志向のゆくえ」から成る。それぞれの部に含まれる章の表題は略すが、第1部では『潮騒』『金閣寺』『鏡子の家』といった中期の作品が「日本回帰」と「戦後批判」の視点から論じられ、第2部では『憂国』『美しい星』『絹と明察』といった作品が、エロティシズムとロマンティシズム、及び父親の形をとって現れる天皇の表象などをめぐって論じられる。第3部では『サド公爵夫人』『英霊の声』『朱雀家の滅亡』などの、戯曲を中心とする作品群が取り上げられ、「ザインとゾルレン」の二面性を強める天皇への意識の表象が中心的な問題として論じられている。

第1部では、三島における「日本回帰」がいつ頃から、どのような契機によって始まったのかが中心的な問題として提示されている。高氏によれば三島の「日本回帰」が始まるのは昭和26年から27年にかけて行われた世界旅行の後に書かれた『潮騒』を契機としているが、それはちょうどその頃がサンフランシスコ講和条約によって日本があらためて占領体制から「独立」を果たした時期に当たっていることを反映しているという。三島の「日本」への意識自体は、日本古典を耽読した少年期から明瞭にあるが、それは戦争による終

末感と結びつくものであり、必ずしも諸外国と差別化される「日本」への意識表明としての意味をもたない。『潮騒』では伊勢湾の孤島を舞台として漁師と海女の恋物語が展開されるが、沖縄の海で嵐に流されそうになった船を繋ぎ止める主人公新治の活躍に、戦後日本の未来が託されているとともに、その場面が当時アメリカの統治下に置かれていた沖縄に設定されているところに、アメリカへの依存を問題化していくことになる三島の姿勢が萌芽的に見られるとされる。

『潮騒』に垣間見られる対米依存の問題は同時期の『真夏の死』や『鍵のかかる部屋』にも投げ込まれており、とくに後者が占領時の日本において「財務省」に勤務する青年を主人公とし、その陰鬱な性的幻想を主題として描いているところに、対米関係がもたらす抑圧が示唆されているという。『金閣寺』に見られる、主人公溝口が米兵に命じられるままに娼婦の腹を踏んで流産させる場面が、作者の対米意識を表すとともに金閣放火の伏線となっていることはこれまでも指摘されているが、高氏はそれに加えて溝口が放火の際に金閣の「究竟頂」で自殺しようとして、その扉が開かなかった場面に、この空間が「禁忌」として意識され、それが三島の天皇への意識に連続することを指摘している。『金閣寺』につづく『鏡子の家』は力作の長篇であったにもかかわらず不評に終わったが、高氏はこの作品の冒頭に描かれる、四人がそれぞれに時代の「壁」に対峙しようとする姿勢については着目すべきものとして言及し、とくにサラリーマンの清一郎が「許す」という意識で外界の物事を受け容れようとする姿に、この作品に込められた三島のニヒリズムが看取されるとしている。そして終盤絵が描けなくなった画家の夏雄が、水仙の花との出会いを契機として再生に向かうのは、水仙に込められた現実世界を収斂させる象徴性のゆえであり、その機能が三島の天皇に託されるものに連続していくことになるという。

第2部においては各章においてそれぞれ『憂国』『美しい星』『絹と明察』が作品論的に論じられ、そこに比喩的、寓意的に表象されている天皇の像を捉えようとしている。二・二六事件を素材とする初発の作品である『憂国』では、朋友を裏切らないために妻と心中する軍人夫婦の性の営みと自死の姿が描かれるが、ここに色濃く現れているエロティシズムには、当時三島が感化されていたバタイユの影響が見られる。三島がバタイユの言説に見たものは死によってもたらされる連続性であり、その連続性の具現を古代から現在に至る天皇の連続性に見出すことに三島を導くことにもなったと高氏は述べている。『美しい星』と『絹と明察』はともに家長的ないし父親的人物が敗北を味わう展開を取るが、前者の重一郎は地球を救済する使命を担う「宇宙人」としての自認を、遠方からやって来た虚無的な思想を語る人物に砕かれ、後者の会社経営者はその独善的な家族的経営理念を、やはりニヒリスト的人物の策動によって否定されるに至る。この家長的人物の敗北に、戦後の天皇に対する三島の否認を高氏は見ている。『美しい星』ではその代償のように、最後に重一郎の家族の前に本物の「円盤」が現れるが、それは重一郎の「ロマン的願望」の具現にほかならず、『鏡子の家』における「水仙」と近似した、現実世界の収斂地点としての中心性をはらむ存在であり、理念的天皇の比喩が込められているとされる。『絹と明察』にはそうした形象が描かれないものの、経営者駒沢の姿には「日本的なもの」の色合いが強く託されており、彼が否定される展開に三島の戦後批判が込められているとされる。

第3部では第2部にひきつづき、後期作品における天皇の寓意的表象について考察され

ている。『サド侯爵夫人』における主人公ルネを三島自身に重ねる見方は古くからあるが、高氏は彼女が牢獄から帰還した夫サドを拒む帰結に、三島の戦後天皇に対する否定を見ている。この作品のサドには道徳を超越した〈神〉としての像と、醜く肥え太った老年の男の像の二面性が付与されているが、それぞれが戦前・戦中の〈神〉としての天皇と、〈人間〉になり下がった戦後の天皇に照応するとされる。ルネが「貞節」を誓ったのはあくまでも前者の〈神〉としてのサドに対してであり、その基底には『古事記』における倭建命のイメージがあることが指摘されている。『英霊の声』では戦後の「人間天皇」に対する糾弾が露わだが、『朱雀家の滅亡』でも天皇に仕える者としての主人公経隆は同時に天皇の代弁者でもあり、「どうして滅びることができる。夙うのむかしに滅んである「私」が」という末尾の科白には、戦後を生き延びた天皇への揶揄が込められているという。そして終章にあたる第10章では、三島における〈絶対的・超越的なもの〉への志向と天皇との関わりがあらためて問題化されている。高氏によれば、三島における天皇像は「思想の相対性」の上に成り立っており、祀る行為によって天皇に神性がもたらされるという和辻哲朗の天皇観と重ねられる面があるという。三島の超越的な天皇像は『古事記』の倭建命から汲み取られていることが想定されるが、「相対主義」を基底としつつ〈絶対的・超越的なもの〉を表象として仮構することに三島的な天皇観があったとされる。

○論文の評価

本論文に対しては、まず膨大な三島由紀夫作品とそれに対する研究批評、論文を読み込んだうえで、作品論の羅列ではなく、独特の天皇観を梃子として戦後日本を批判的に描き出した世界として三島文学の総体を把握するという、明確な方向性が打ち出されていることが評価された。三島自身の軌跡とその背後にある時代の姿、及び思想的文脈に眼を配りつつ各作品が論じられており、質量ともに十分な手応えのある仕上がりになっていることについては、審査委員全員が賞賛を与えた。三島作品に対しては、これまで様々な角度から論が重ねられてきたことはいうまでもなく、それらを踏まえつつ独自の視角を提示するのは大変な作業となるが、高氏は先行論の堆積に臆することなく、それらと対峙しつつ自身の見解を提示しようとしている。

中心的な主題となっているのは、表題にも見られるように三島の「日本回帰」の展開とそれと背中合わせになった天皇への意識の深化との関わりでの探求で、それを二十代半ば以降の作品の表現から析出していこうとしている。一見牧歌的な世界に映る『潮騒』が昭和26～27年に行われた世界旅行の後に書かれていることの意味を探りつつ、同時期に日本が敗戦後の占領状態から脱してあらたに「独立」した状況がそこに映し出されているという考察から始まって、虚構的な物語世界に刻まれた折々の時代社会の相貌を捉えていく手つきは総じて手堅く、作品世界に次第に浮上してくるとされる「天皇」の表象の掘り方も大きな飛躍がなく、相当の説得力をもって行われている。

三島作品の人物に天皇の寓意が託されているというのは、従来もなされてきた把握ではあるが、高氏はそれらを踏まえつつ、その読み取りを多くの作品に広げつつ、三島の戦後批判の様相を仔細に把握している。また三島が想定する「理念的天皇」の原型を『古事記』における倭建命に求めるというのは、これまでにない独自の視点であるといえ、三島が古

代世界に対して抱いていた愛着を考慮すれば妥当性をもった解釈と見られるという評価が与えられた。また三島がその天皇観を触発されたのは折口信夫の言説によっているというのが定説としてあるが、高氏はそれも踏まえつつ、むしろ『日本倫理思想史』における和辻哲郎の天皇観との異同を重点的に考察しており、この比較の軸はこれまでの三島論ではほとんど示されなかったものであるだけに、高氏の着想の新しさとして評価された。

これらの肯定的な面に対して、論の構築として不十分な点もいくつか指摘された。まず審査員に共通する不満として、三島の晩年のライフワークである『豊饒の海』が論じられていないことが挙げられた。『春の雪』に始まる四巻には三島の天皇観と時代意識が様々な形で盛り込まれており、本論文の主題と直結するだけにやはり章を立てて論じるべきであったという意見が強かった。また作品から天皇の表象を抽出することに意が注がれているあまり、三島的表現の独自性への分析、考察がやや不足しているという面がある。あるいは和辻の天皇観との比較は興味深いものの、その相似性に力点が置かれ、両者の差異がもっと考察されるべきであったという批判も出された。

これらの指摘に対して高氏は誠実に応答し、自身の現在の見解を明らかにするとともに、今後の課題としてそれらに取り組んでいく旨が示された。全体としては練達の日本語で書かれた、質量ともに豊かな論文であり、最終試験での応答を踏まえた上で、審査委員会は全会一致で、高氏の提出論文を博士の学位にふさわしいものとして判断した。

